



「夢」について



て

ヤマダヒフミ

幸福というのは、義務の容認の元にある。・・・例えば、ある種の暴君が、自分以外の人間を全て、自分の奴隷にしたと、仮定しよう。・・・自分以外の人間を奴隷にしたいというのは、どうやら、人間に備わった根本的な獣性の一つに思える。

だが、この暴君というのは、その奴隷が、一挙手一投足全て、自分の言葉の命令に従い、たとえば、自分が首を吊れといえ、すぐに首を吊るようなそうした下僕ばかりたとえ集めたとしても、やはり苛立ちと殺意は募るだろう。元々、この人間は、他人の自由を認可できない性質の人間だったので、他人を全て奴隷と化したのだが、結局、そんな事をして、自分の内部の苛立ちと、自分自身への憎悪からは逃れられない。・・・他人が憎いと考えている人間は、全ての人間を抹殺した所で、自分の中にまだ憎悪がわだかまっている事をはっきりと感じるはずだ。

何故、こんなことを言い出したかと言うと、ふと思った事があるからだ。・・・それは、簡単な事象だ。・・・結局、現代に生きる我々というのは、壮大な夢を、希望を見る事を許された――というより、強制された人種だが、それに伴う、義務と苦痛の事についてはほとんど知らずにここまで来た、という事だ。

この世界は無知の人間で溢れている。この世界で何事かを知っている人間というのは、結局の所、もし、人が、自由を謳歌したければ、黙々と、自分自身と向き合い、その存在に耐えなければならぬという事を知っているタイプの人間だと思える。

こんな事を言っても仕方がないが、まずは、自分の心に語りかけてみる。

僕達は幼い頃から、様々な夢を見せられて生きていたような気がする。・・・教育ママ、のような存在を見ると、僕は今も、そうした事を思い出す。まだ、悪夢は続いているのか、と。

夢を実現するという事は不可能ではない。それが、才能のある一部の人間に許された事であり、凡人には不可能――まあ、そんな事は、どうだっていい。地上にいたまま、天国をいくら想像したって仕方がないではないか。

問題は、何かを実現する時に、我々が失う犠牲に由来する。太宰治は、「自分は人としては死に、芸術家として生きる」という旨の事を言った。・・・この言葉について、勝手に、分析するのであれば、三流の芸術家でも、「自分は芸術家として生きている」、と言う事は可能である。だが、「自分は人として死ぬ」という前半の部分は言う事ができない。・・・できない、というより、言う必要はない。三流であっても、それなりのものは間違いなく作れる。だが、その存在を賭けた作品というものは決して、つくり上げる事はできない。何故ならば、この生の世界の存在を一度捨て去らなければ、フィクションの世界において、その作者の存在全体を表現する作品は作れないからである。彼は、ここで全てを犠牲にする。文字通り、全てを犠牲にする。だが、人は、この犠牲については見まいとする。あるいは忘れる。あるいは、最初から、見る事ができない。

もし、夢を実現させたければ、このように、全てを犠牲にしなければならない。・・・この全てというのは、時間とか、肉体とかいうより、それらをも含んだ、もっと抽象的なものだ。・・・言うなれば、それは「希望」だ。この世界に希望をつないでいる内は、決して、偉大な創造者とはなれないだろう。なぜなら、希望というものが現実につながっている限り、全ての作品は紐付きのものになってしまうからである。印税を夢見て、書かれた作品というのは、いわば紐付いている。・・・別に印税を目指すのが悪いなんて事では全くない。印税の為に書くのも、大いに

結構な事だが、少なくとも、書いている瞬間は、この世の全てが消失して、その作品のその世界観だけしか存在していない——そういうものを書くという体験がなければ、おそらく、何かを書くという行為自体が無意味だという、そうした事が言いたいのだ。

「役に立つ」とか「利益」とかいう便利な言葉がある。これらの言葉は便利だが、使っている内に、人には見えなくなってくる事実が一つ、あるだろう。・・・結局、何の為に役だっているのか？・・・という問題がそれだ。金は必要だ。住居は、必要だ。食料は必要だ。だが、高価な時計は必要か否か？・・・これがもし不要だというのなら、人間は、アメーバにまで退行した方がむしろ、すっきりするのではないか？・・・アメーバにとって、何が役立つか、という問題の方が我々よりはシンプルだからである。

・・・というより、人間というものがそもそも、何を目指し、何を役立たせるのか？・・・という問題には興味がある。・・・人が、今のように、生理的快楽を究極的な目標と置くのなら、一体、何の為に、僕達は存在しているのだ？・・・と、問う事もできる。「役に立つ」という言葉は、はじめは非常に明瞭に見えるが、段々とあやふやになっていくものだ。一体、何が役に立ち、何が立たないか・・・と。

「夢」という抽象的な言葉を使ったのが悪かったのかもしれないが、とりあえず、最後まで書く事とする。夢を実現させるとは、夢という植物に、自らを肥料として差し出すという事である。人は、自分の子供や、自分の成功を夢に描いて、それにバラ色の未来を想像するのもかもしれない。・・・だが、そこに、バラ色の未来というものは存在しない。・・・それは、正に最初に言った事だ。・・・たとえば、僕が、スターになって、ちやほやされることを目指し、発進するでしょう。そして、それに成功したでしょう。・・・だが、僕が、次の瞬間に思う事は、「みんなはどうしてスターの俺をもっとちやほやしないのだ？」という事だ。

夢を実現するという事は、自らを夢という怪物に喰われるという事である。それが、他人からどんな栄光に見えようと、また、どれほどの悲慘に見えようと、それこそが彼の人生である。彼の人生というのは、おそらく、他人の人生とは違う。他人の——普通の人生というのは、事物が我々に大して、どれほど「役に立つか？」という問いから始める。だが、彼の人生は、自分という存在がどれほど、夢の実現に役立てるのか？という問いから始める。彼は、自分を捨てる事で未来をつかむ。だが、未来というのは自分ではない。自分ではないが、彼は自分を捨てるので、自分を捨てた時だけ、彼は未来と合一する。そこで彼は、一種の栄光を掴む事になる。そして、我々はおそらく、ずっと、バラ色の未来を待ち続けて、そうして永遠に、泥濘の過去を這いずりまわる事になるのだ。